

令和7年度 SSTA福島支部 冬季研修会実施報告

【実施日時・場所】令和8年2月21日(土)13:00~16:30@郡山市立明健小学校

【参加人数】31名(小学校 24名、中学校 2名、義務教育学校 1名、指導主事 2名、大学 1名、民間 1名など)

【研修のねらい】

- 令和7年度の「ソニー子ども科学教育プログラム」入賞校の研究発表を通して、来年度の授業実践における「わくわくの種」を見つけることができる。
- 各入賞校のテーマについて協議し、自身の授業観や子ども観をアップデートすることができる。

【研修の様子】

○ 開会行事・趣旨説明

青田雅子支部長の「子どもがわくわくするためには、まず先生がわくわくすることが大切！」という熱いメッセージから研修がスタートしました。その後、研修部より今回の研修のねらいや研修方法について説明がありました。今回は「発表→協議」を3セット行うという、福島支部にとって「新しい研修スタイル」への挑戦です。どんな学びが生まれるのか、会場は期待感に包まれていました。



○ 各受賞校の研究発表・グループ協議

優秀校を受賞した、福島大学附属小学校・福島市立三河台小学校と、最優秀校を受賞した郡山市立明健小学校の3校の研究発表を行いました。また、発表の後には、それぞれの発表校から提示されたテーマに対して、グループ協議を行いました。各校の研究発表概要は、以下の通りです。

① 福島大学附属小学校(菅野 龍二先生)

【遊びが学び、そして自走する子どもへ】

「探究の時間」を軸に、子どもの「遊び」を「解決すべき問い」へと高める教師のかかわりが紹介されました。「科学が好きな自走する子ども」を目指す姿に、参加者全員が、子どもの無限の可能性を再確認することができました。



② 福島市立三河台小学校(熊谷 泰輝先生)

【教師の構え：学びの内側か、外側か】

子どもの姿を「再現性のある視点」で語るために設定された「教師の構え」。子どもの学びの「内側」に立つのか「外側」に立つのか。意識的な選択が子どもの姿を変えていく様子に、思わず「なるほど！」と頷く声が聞こえてきました。



③ 郡山市立明健小学校(鳴原 卓先生)

【9年間で子どもを育てようという“Slow pedagogy”のまなざし】

小中接続の強みを生かし、9年間という長いスパンでじっくりと子どもを育てる視点は、まさに「スロー」な探究の真髄！また、6つの問題解決タイプを子どもと共に選択する授業スタイルと、具体的な授業実践における子どもの姿を目の当たりにした研修者は、思わず感嘆の声をもらしていました。



各校の発表後のグループ協議では、次のようなテーマが提示されました。

【附属小から】

子どもが「なんとなくの興味」から「解決すべき問い」にするために、教師が大切にしたいこと

【三河台小から】

授業における「教師の構え」として大切にしたいこととは

【明健小から】

理科教育における「やさしさ」とは

各テーマに対して、研修者同士が日頃見られた子どもや教師の姿を基に、熱い議論を交わす姿が心象的でした！



○ おさんぽタイム

各班の熱い議論の結果がホワイトボードに並ぶと、「おさんぽタイム」のスタートです！「お～！」「その視点はなかった！」といった感嘆符付きの生の声が飛び交い、あちこちで「熱い立ち話」が。全体発表よりも近い距離感で、自分の思考を整理する充実した時間となりました！



○ 総括(福島大学大学院教職実践研究科 教授 鳴川 哲也先生)

鳴川先生から、各校の発表を聴いての感想についてのお話がありました。また、各校の発表を聴いて、理科における問題解決のその先に見えるものについて、鳴川先生のお考えを伝えていただきました。「問題解決には、子ども一人一人の経験が土台として必要であること」「全員でいっしょに進めていく問題解決も大切だし、子ども一人一人が自分で進めていく個別最適な問題解決も大切。どちらがよくて、どちらがダメということではなく、バランスよく子どもたちが経験できるようにしていくことが大切」であることとお話していただき、今後の授業づくりにおける「わくわくの種」をたくさん見つけることができました！



○ 閉会行事

遠藤謙一常任理事からは「オール福島で全国へ発信しよう！」という力強いエールをいただきました。福島科学教育の底力を、誰もが確信したに違いありません！

